Chapter 5 : **炎の子、目覚める**

幾年の歳月が流れた。

暴君も、怪物も、ガチャの悪夢も去り、ようやく自由を手にしたブラッキーとエーフィは、一匹の明るく聡いイーブイの息子を育てていた。その子は好奇心旺盛で優しく、どこか身体が妙にあたたかかった。

ある日、穏やかな訪問のさなか、ホウオウがそっと彼に一つのほのおのいしを手渡し、囁いた。

「己の道は、自らの炎で照らすんじゃ。」

炎が閃き、次の瞬間――イーブイはブースターへと進化した。

森の空気は、それ以来ずっと変わったままだ。

ある日、まだ若いブースターは、蝶を追いかけたり、枝を燃やしたりしながら、いつもより深く森の奥へと入り込んだ。

そこで彼が見たものは、凄惨な光景だった。

両親――ブラッキーとエーフィが、異形の怪物に押さえつけられていた。

その姿は、マッシブーン。

隆起する筋肉。狂気じみた眼。二匹の上で誇示するようにポージングしていた。エーフィのサイコパワーは抑えられ、ブラッキーは毒により動けなくなっていた。

「今日は虫タイプの宴だ……」とマッシブーンが唸った。

ブースターは固まった。「……ママ……パパ……？」

「……逃げろ……あいつ……むし……かくとうだ……」  
ブラッキーが咳き込みながら言った。

マッシブーンがゆっくり振り返った。「ほのおの赤ん坊か？　可愛いもんだな。」

ドンッ！

彼が飛びかかった瞬間、ブースターの口からほのおが噴き出した――初めてのかえんほうしゃだった。

マッシブーンの脚に命中。火傷を負って叫ぶ。

「このガキィィ……！」  
マッシブーンは怒り狂い、吸収の腕を伸ばして襲いかかる。

だがブースターは歯を食いしばり、体内に燃える火を解き放った。

「フレアドライブ！！」

彗星のごとき衝撃がマッシブーンの胸を直撃。そのまま彼を吹き飛ばし、豪華なヴィラの露天風呂へと叩き込んだ。

マッシブーンは温泉に墜落した。その周囲には――

* サングラスで日光浴しているバンギラス
* モクテルを飲んでくつろぐフェローチェ
* 湯に浮かびながらあくびしているエンニュート
* ヨガポーズを決めているドレディア

全員が静止した。

バンギラスがサングラスを持ち上げる。「……あれ、マッシブーンじゃねぇか？」

フェローチェが目を細める。「あたしの元旦那……！？」

マッシブーンはうめき声をあげ、半分焦げ、半分羞恥にまみれて気絶。元妻とその仲間たちの前に、惨めに横たわった。

ブースターが歩み寄る。息を切らしながらも誇らしげに言った。

「アイツ、僕の両親を傷つけようとしたんだ。」

バンギラスがごくりとベリージュースを飲みながら言った。「火力あるな。認めるわ。」

フェローチェはブースターを見て、口元に笑みを浮かべた。

「……あんたのパパ、ちゃんと育てたのね。」

場面は、倒れたウルトラビーストの前に堂々と立つブースターの姿へとフェードアウトしていく。

家族の愛と復讐の炎が、今も彼の中で燃え続けている――。